

(財)和敬塾 講演 昭和50(1975)年6月25日 於:和敬塾講堂
『ヒマラヤの開発と参画』

文化人類学者 川喜田 二郎先生

和敬塾誌「和敬第24.25号合併号」より転載

ただいま御紹介いただきました川喜田でございます。皆様が上衣をぬいでおられて私だけ上衣を着ているのも、なんだか雰囲気がちぐはぐでよろしくありませんので、私も上衣をぬがせて頂きます。

さて、今日適当な題をつけさせて頂いたのですが内容は何かといいますと、ヒマラヤの山奥に対する技術協力のお話をさせて頂こうと思います。実は、ご縁がありましてヒマラヤのほうへ、戦後ネパールの方へばかりまいりました。ヒマラヤにはネパール・ブータンそのほかインド領のところもありますし、パキスタン領のところもある。何しろ延々たるヒマラヤの面積が何平方メートルになるか、と言う事はもう覚えていませんが、地図をご覧頂ければすぐ分かります。日本列島全部を呑み込んでしまうぐらいの延々たる長さでございます。横幅のほうも、日本列島の一番分厚い中部地方ぐらいはあるのです。世界に名だたるエベレストを始めとする山々がある。ですから、そういうことを誰しもすぐ感ずるわけです。

行って見ますと思いがけないことが色々ございます。初めて行ってびっくりしたことの一つは、きわめて当たり前のことですが、ヒマラヤというと雪と氷の世界という印象を持っていたのです。ところが、何と麓は熱帯なのです。もうちょっと厳密に言うと、バナナやマンゴーが実る亜熱帯といった方がいいかも知れません。亜熱帯から雪と氷の世界までまたがった、世界で一番短距離の間に、赤道から極地まで駆け登った様なところなのです。

そこへ始めてまいりましたのは1953(昭和28)年でした。大体5年きざみぐらいに長期の研究調査旅行のようなことをしていました。3度目(今から12年前)にまいりました時ヒマラヤの北側で暮らしたことも有るのですが、今度は南側で暮らしてやれというわけで、現地に約7ヶ月滞在しておりました。これはヒマラヤに詳しい方もおられるかも知れませんが、最高峰は8,000mをちょっと超えているアンナプルナという非常に高い山があります。そのすぐ西脇にアンナプルナより高いダウラギリという8,200m近い山があります。この両方を毎日頭上に仰ぎ見て暮らすような山奥の、ある小さな谷で7ヶ月暮らしました。見上げれば雪と氷の世界、見下ろせば目も眩む様な下のほうまで見え、谷底のほうまで行けば私の持参した高度計で、海拔1,200mぐらいの低いところまで見え、中腹に引っかかった海拔2,000mぐらいの村に7ヶ月暮らしました。その時の目的は学術調査だったのですが、私はこういう山奥の人達に何かささやかなことでもプラスになることは出来ないかという事を毎日考えておりました。何故そ

のようなことを考えたかといいますと、人間というものは異国へまいりましてそこで長く暮らし、長いだけでなくその土地と関わる仕事をいたしますと、情が移るのであります。その土地と人が好きになる、そういう事が人情というものにして、そういう事を過去に2回やった結果、3回目のときはもう何か自分で出来ることで生活に役立つことは無いかと、最初から考えていました。

本職の学術調査、これは異民族の研究が専門ですから民俗学とか文化人類学といいます。本職の傍らどういう方法を取ったかといいますと、先ず本職のお家芸を出し、村人達の生活構造をしっかりと掴もうとしました。わたしは元々地理学からスタートしましたから、自然環境のような物を調べるのは得意なのです。村人がどんな森林、或は高山帯の草地、という環境の中でどんな暮らしをしているか、これを調べました。大体から申しますと、村が何十件か固まってあり、それを取り巻いて急斜面に段々畑があり、その外側に放牧地や採草地にするためのやや草地の多いようなところがあります。もっと外に行くと、森林、その森林帯も高くなると高山帯になりお花畑になってしまう。それより高いところは雪と氷の世界になる。そんな同心円の構造をしています。段々畑というのは、気の遠くなるような急斜面に作られているのですが、我々日本人が見るとそそっかしい話ですが全く水平な階段耕地に見えるのです。中には全部水田と錯覚を起こす人もいます。日本人は水田を見慣れているものですから外国へ行きまして階段耕地を見ると勝手に水田に見えてしまう。ですが良く調べてみると稲の栽培できるのは海拔1,800mぐらいまでで、それより高いところは全部畑作地です。その畑作地はどうなっているかという、全く水平なのです。よくカウンターライン・カウンターゲーションなんて言いますが、そうっていないのです。網目がピシャントおしつぶされたような階段構造なのです。これが誠にうまくできていて鋤で耕しながら、一段目を耕し終わると次の段に移って行きます。網目状に上の段と下の段がくっついていきますから、スーッとエスカレーターのように次の段に移って行きます。もしこれが日本の山田の段々ですと一段目を耕し終わるとドッコイショと鋤をかついで牛を追い上げるか追い落とさなければなりません、そんな必要は無いのです。耕しながらシュッシュュッシュュッと段を上にあがっていくのです。何故上から下へ耕さないのか聞いてみると「だいいち縁起が悪いよ」と言うのです。ほんの一例ですが、下から上へ耕しますと、畑を鋤で耕す往復コースの一番縁の土が落ちにくいのです。上から下へ耕しますと段の内側から外側へと耕しますから、最後にポロッと土が落ちやすいのです。長い年月の間に土は段々流れ落ちていくのですが、それを防ぐ意味でも役立っていたのです。我々から見て何のためにこんな事をしているのか？とよくよく調べると、知らないのはこちらで村の連中の方がよほど賢いのだと思うことが沢山あります。3ヶ月位かけてそういう生活構造を調べ、4ヶ月目ぐらいになった時に幾つかのアイディアが自然に浮かんでく

るのです。その生活構造が分かってくるとハハーンと思うことがあり、きっと役立つであろうアイデアが現実に密着して生まれやすいのです。

次に私は、夜の囲炉裏で焚き火に当たりながら村人と雑談をし、その中にひとつずつ身に付いたヒントを話題の中に出していきました。色々な雑談に混ぜて話題を一つ出し「日本のこういうものがもしこの村で使われたとしたら、あなた方はどう思いますか？」というような調子で次々やって行ったのです。するとおもしろい事が起こってきました。あるアイデアは全然熱意がないのですぐほかの話題に移っていく。反対にヒットした話題は「そんなことができるのか？ できるのだったら明日にでもやりたい」と、大変に盛り上がります。つまり話題によって熱意の度合いをカーブに表せばかなり低いものからかなり高いものまであるのです。所が驚いたことに、そういう話題には決して私自身の評価をほとんどしていないのです。とぼけた顔で話題に出しているのですが、心中では自分で考え出したアイデアが12~3もありまして、このアイデアはあまり金がかからず、しかも村人にとって膨大なプラスをもたらす(ベストワン)だろうと、大体の順位をつけていたのです。別のアイデアは根本的な解決にはいいかもしれないが最初から実行するには中々難しい、というようなものは心中ではちょっと減点されます。これはすぐにできるが、やったとしてもプラスはプラスであるがたいした事ではないな、というように心中に順位があるのです。私のつけた順番のカーブと村人の順番のカーブがピタッと一致してきたのです。それで私が非常に驚いたのですが、私が恐らくもっともこの地域にふさわしいだろうと思っていたNo1・No2 ぐらいのアイデアに村人が熱狂的に反応したのです。そしたら晩の囲炉裏端の雑談から飛び出したものが、アレオアレオという間に広がりまして大変なことになりました。そのアイデアを二つ申し上げます。

一つは軽量のロープラインです。日本で言いますと蜜柑山か茶畑を連想していただくと良いと思います、蜜柑・茶の積み上げや積降に、或は肥料の運搬に、と色々な傾斜地利用のためにロープラインを使います。私の考えました事もその中でも最も原始的なもので、もう日本には無いかもしれないと思われるような技術だったのです。動力は使わずに高いところから低いところへ、鉄線を張っておきキャリアに荷物を載せてストーンと落とすだけ。終戦直後の日本でも下げる一方の原始的なものが主流でした。ところがそれから3・4年経ちますと日本では急激に発達しました。だんだん軽量の物から重量の物になり、無動力の物は無くなり大概動力化されています。ですが、ヒマラヤの山奥の状況を考えますと、その最も原始的な物が一番役立つと判断されました。こういう物を軽量の荷線で「軽荷線」と呼ぶこともあります。下げ荷で軽荷線を使おうという事なのです。これをその辺の村々につけたら大変なプラスになるのです。投入した資金労力に対し、生み出す効果は膨大である。そこは生活構造を調べてある強みなのです。

私がこのアイデアをかつて言いましたら、ネパールの首都カトマンズに来ていたあるフランスの技術者にあざ笑われました。「川喜田って馬鹿な奴よ、下から上へ荷物を上げる事もできない、上から下に落とすだけ、そんな物をつけてなんの役に立つのか」と言われたのです。で私から言いますと、そのフランス人の何と頭の悪さよ、という事になります。なぜなら、下から上へ上げ荷をする必要性が大きいところなら私が馬鹿になるのですが、私が今申しているような村々は日常構造が大体上から下へ運べば、ほとんど農業用の運搬の目的は達するという場所なのです。そういう所へ得意気に動力を使って下から上へ上げて喜んでいるのが、技術馬鹿と言う奴なのです。と私は思っています。一体何を運ぶ必要があるかと言うと、村人は膨大な量の草と薪を運ばなければならないのです。草は家畜の飼料にそして家畜は本命で、いわゆる耐久肥、堆肥厩肥になり肥料源になるのです。彼らの生産は畑の作物だけではなく沢山の家畜を飼ってミルクをしぼる。薪は炊事・暖房のほかに、このミルクを朝早くから薪でボイルしてバター・チーズを作っています。ですから薪は非常に大切な物なのです。ほかに運ぶべき物は石材等色々ありますが、先ず草・薪が最重要課題なのです。それをどこに取りに行くのか、最近の言葉で言うところのエコロジカルな生態学的にその村々の縄張り・構造・色々調べました。ほとんどが上から下へが多いのです。それを人力で運ぶのが如何に大変かという事です。大の男はもちろん女子供も、ほとんど小一日かけて我々ならフーフーいって1時間も2時間も登らなければならないような遠くまで薪とりに行く、草刈りに行く。そこで集材してヨイコラヨイコラと又持って帰る。小1日かけて僅か30キロや位の草を山のようにかついで山から下りてきます。その小1日かかって30キロの草を大動物の水牛なんかだったら、2日間でペロリです。それで肥料になる分もありますが、要するに2日間です。フーフーいって小1日間かけて2日間で消費してしまうのです。それからまさか道楽に水牛一匹だけ猫みたいに喜んで飼って暮らすわけには行きませんから、何頭か飼わなければなりません、牛も飼わなければならない、羊や山羊もとなってくるわけです。また家畜ばかり世話するわけには行かず、畑も耕さなければいけない。収穫もしなければいけないし、時には水産物で商売に行かなければならない。そのなかでの輸送ですから、これは涙が出るようなものなのです。彼らの人生は、というよりも彼らの言葉を借りれば、我々の人生はまるで「運びの人生」だというわけです。そういう強烈な輸送、潜在的な運搬労働の苦しみがそこにあるのです。そこへ鉄線を張りますと、これはまさに革命的で、これはまさにNO1だと思っていれば、村人はその話を囲炉裏端で聞いていまして興奮してしまいました。ある村の村長のごときは全然眠らなかつたという。そこで一つの村に推進委員会、実現推進委員会を作る事になり、その前に村民大会を開きました。

村民大会で議題の一つとしてその問題を出しましたら、爆発的反響が起こった。早速推進

委員会が作られ、私は推進委員会顧問ということになり、えらいことになってしまった。言わなければ良かったのと思う位です。ところが立ち上がったら、すぐ隣り村も負けん気を出す。こっちの村もそうだというわけです。もう堪忍してくれというわけです。そこで3~4ヶ村の範囲に止めてもらった。こんな事になったら拾収がつかない。ところがその3~4ヶ村がお互いに仲が悪いのです。そこで私はうまい理屈を考えました。まあ皆さんの村々はお互いにあまり仲がよくないということを私は知っていますよ。そんな所にうっかりロープラインを架けたら、ロープラインが喧嘩のもとでなんていうことになったら誠に悲しい。だから、私は皆さんが仲よくやるという保証がない限り、そういうことはできないといったのです。そうしたら、そうかというわけで、48時間以内に3ヶ村の誰だったか走り廻って「決して我々は喧嘩をいたしません」と決めたのです。いよいよこれは実弾が入っているという事です。こうなると、私はもう逃げられません。そこで仕方がなしに、皆さんの熱意はよく分かった。しかし私はお金がないのだと言いました。それから失礼ながら皆さんの財政もたいしたことはないことも私は知っていますよ。ということは、これを実現するためには、例えばおたくの国のネパール政府とか、あるいは外国の財団であるとか、日本のどこかであるとか、そちらにキャンペーンをして資金を集めなければならない。その時に皆さんはこういう事が非常に重要な事であるとして相手を説得しなければならない。説得するための最善の方法は、どういうプラスがあるかということ具体的データで示すことである。少なくとも直接的な経済計算ぐらいは必要で数字にして置かなくてはいけない。今からその経済計算の委員会を開こうと提案したのです。そうしたら「ようしてきた」というわけです、その集まってきた委員会が、延々長い時間かかって、これでいいのかという委員会です。猛烈な情熱が籠ってやっているのです。何を議論しているかという、水牛1頭の落す糞の量はどの位だろうかなんて、いやそうじゃない、人間1人が薪をどの位かつぐだろうかとか、計算諸元という事について猛烈な議論をしているのです。ところが向こうは日本の様に立派な集会所はありませんから、屋外でお天気のいい冬の季節でしたが集まって委員会を行っているのです。すると、女将さんや娘さんが水くみや又、重い物を担いでそばを通るのです。すると親父さんが張り切って、そうじゃないのだ、こうなのだと自分の迷論卓説を述べていますと、娘さんが水くみに行くのを忘れて途中で立ち止って、お父さん、それ違ふよ、こうだと口出しして、親父は頭かいているという愉快的な会議を延々とやったのです。

その代りそういう様な事を行いましたから、どんな効果が起こるのだろうかについて、現地側の経験からにじみ出たデータとしては、これ以上は望めないというデータが出ました。いくら経済計算の専門家で、日本から立派な経済学者が行って計算したところで、現地の生活体験を持っていないから、そんなデータは割り出せない。すなわち、外部からの専門家だけでは決していいデータはできない。土地の人ばかりでいいことができるかといいますと、それ

は外部からの多少とも経験のある人のあるアドバイスがないと計算の仕方も分からない。内外が協力しなくてはいけない。私はもうかくなる上は逃れられないと覚悟し「私が皆様に必ず実行するということは決して約束できない。なぜなら、だいいち金からしてないのです。私が実現できるように自分の範囲内でベストを尽くして見よう、そこまでならできるだけ、約束してもいい」ということになりました。もう12年も前の話です。帰ったらなんとか実行したいと思っていると、馬まで用意してくれました。ちょうどヒマラヤの春先であのシャクナゲでなく、一抱えもあるような大木で、それに燃えるような真紅の花が満開になるのです。だんだん高いところに行きますと、真紅からピンクに変わって、最後に真っ白にまで変わるのです。そのシャクナゲの咲く頃でした。馬を提供してもらって、どうしても馬に乗って行ってくださいと言うから、左様しからば乗るぞ、というわけで、実は内心色々の心配もあったのですが、しばし忘れて「おおヒマラヤも春じゃ」なんていいながら帰ってきました。

帰途向こうのネパール政府を説得し、報告書を書いてアドバイスをし、一所懸命やったのです。ネパール政府もかなり関心は示しましたが、日本に帰っても同様なことを日本政府の関係部局を説得し、さらに民間企業には資金の問題について色々協力を求めましたが、不幸にしてその年はオリンピックの年で、その翌年の1956年というはいわゆる鍋底景気で金の話、冗談じゃないよという最悪の状況でどうしようもない。その間に私も腕ぐみして考えた末、うっかり他力本願でこういう技術的協力を行ったら失敗するというのが数年の間の結論です。どんなに苦しくても最初の技術協力はボランティアで行い、こうしてできたではないかという見本を造り出す事が必要である。その後なら政府間の協力もいいでしょう。最初はボランティアで行わないと命取だと思いました。もう一つは、その最初の仕事に失敗したら、それがよしや全く技術的欠陥でなくても失敗は失敗なのです。その失敗の原因が全く我々の責任がないような向こうの役人の怠慢から発生した原因によるものであろうとも、勝てば官軍、負ければ賊軍なのです。特に最初の試みに失敗したら、もう二度と立ち直れない。やるからにはいわゆる必勝の信念です。立ち上がるのは極めて慎重でなければできないが、立ったならばもう朝に一城をほふり夕べに一壘を抜くという、それで勝ちっぱなしで行かなくてはならない。そのためには最初の試みがあんまり欲深いものにしても危ない。小型でいいから是非ともうまく行わなければいけないのです。そんなことから、1964年からスタートを切ってやっとできたのは1974年、つまり去年、ようやく実現の運びにこぎつけました。丸10年かかった。そのうちのちょうど中間ぐらい、今から5年ぐらい前にいよいよやるかというわけです。本腰入れてヒマラヤの山奥への技術協力を私が考え出した。その当時私は東京工大の教授をしておりまして、文化人類学の教授で、研究室を与えられており、そこが策源地であって、いよいよヒマラヤに向けて立ち上がる準備をと思って腹積もりをだんだん進めようとしていたので

す。

ところがその矢先、不幸にも大学紛争です。あのころは熱病のように大学闘争、大学紛争というものが荒れ狂って、東京工大もご多聞に洩れずで、責任上からヒマラヤの話どころではないという事態になってきたのです。その大学紛争の原因を考えますと、全く情けなくなるのは、今日の教育のあり方というよりももっと広く大学のあり方。教育のほうだけでなく、研究のほうも含めて非常に問題だと感じましたので、ヒマラヤの技術協力はしばらく棚上げにして、どうすれば大学問題を根本的に考え直すことができるかという方面につっこまざるを得なくなったのです。その挙句に私は結論として「移動大学」というものを始め、東京工大を辞めたわけです。ヒマラヤの方は中々できなかつた。その間に東京工大の山岳部の学生諸君が現地のヒマラヤに行くことになり、「おい、どこへ行くんだい」と聞きましたら、ちょうど私が技術協力をしようとしている山の裏側なのです。裏山へちょっと行ってくれよといわれましても、それは何しろ高さ海拔 7200mもある高い山です。だから、裏山なんていっても遠征隊でガッチリ組んで行かなければならない。まあ第一回の遠征の試みに行ったのですが、登山のほうはうまく行かなかつたのですが、その登山が済んでから、私のアイディアに協力したいと申し出てくれたのです。出発前から、かねがね私の志を知っておったものですから、是非一部でもいいから協力したいということになり、そこで私は随分考えこんだのです。協力したいということは非常に有り難いけれど、うっかりそれじゃ頼むなんていって失敗されたらアウトです。その失敗がどういう原因であろうとも、勝てば官軍、負ければ賊軍で、あとに大きく影響をひくわけです。私自身が乗りこんでなら、たとえ負けてもあきらめがつきます。ひとだのみで失敗されたら、もうこれはたまらんといいわけ。しかし両者の間には信頼関係が前から準備されていきましたから、最小限の器材をもって、予備テストをしてくれということになりました。

ここでちょっと前にさかのぼりますが、村人が最も熱狂したものは、先程の軽量ロープラインとも一つありました。それは、水運びに苦労しているのですから、水運びを楽にするために硬質塩化ビニールのパイプラインを敷設し、水道を造ろう、ということなのです。これにはちょっと補足説明を要します。ヒマラヤの村々は、日本の山村と大変違うところがあります。日本の村々はだいたい谷にあります。勿論山腹にある村も日本では四国や九州にかなりあることはあります。ヒマラヤでは、それに反して尾根の山腹にひっかかっているのです。なぜそういうことになるかという、ヒマラヤでは山のきざまれ方が極端に狭いという事も勿論あります。それのほかに低い所はマラリヤにやられるのです。大体海拔で 1200m以下位になりますと、昔からマラリヤにやられるのを恐れて、村が減ってきます。それで海拔 6,700mより下になりますと、マラリヤ汚染地帯といわれるぐらいです。いろんなマラリヤにやられるから、昔から人々は経験上恐れて低地になかなか降りてこなかったということもあるのです。ただ、マラリヤ撲滅

運動がWHOなんかで行われたものですから、すっかり事情が変わってきています。

とにかく村が山腹にある。したがって山腹にある村、尾根の天辺にある村、そこへ水を持ってこようとしますと、脇の谷の上流から斜交に山腹を切って水を持って来るよりほかに仕方がないのです。事実そういう水路を造っている村々もあります。ところがここに意地の悪い条件があるのです。それはその辺のヒマラヤは非常に広範囲にわたって地学の用語でいうシストという片岩、スレート岩とも呼んでおきましょうか板のようにはげる地層なのです。そういう少し変成岩化した水成岩があるわけです。この岩の中にはいろんな種類のものがあって、その中で問題を引き起こすのは、雲母片岩というものです。石墨片岩というものもあるのですが、この雲母片岩の柔らかい性質のもの、これは水を吸いますと加水分解を起こして膨張し、そこが切れ目で雲母片岩や石墨片岩が地すべりを起こすのです。それは過去の何百万年、何千万年の間にヒマラヤ全体にそういう自然の地すべりが頻繁に起きてきたのです。ところが、そこへ人間の営みが加わりますと、なお激しく地すべりが起こるのです。例えば水路などを切りますと、地層を切ったところから水が浸透し支えられなくなって、地すべりが起こるのです。その地すべりが起こるのは、登山家はよくご存じですが、地層に順層と逆層というのがあります。順層の方を登りますと、斜面が階段みたいになって、トントントンと安定して登って行きやすい。逆層斜面ですと、いわば爪がひっかかりにくく事故を起こしやすいのです。ところが大変意地の悪いことに、地すべりが起こりやすいため長い年月の間に緩やかな傾斜は逆層の方が多いのです。順層の方は急斜面という傾向があるのです。ですから、集落とか耕作地というものは逆層斜面に乗っかっている、ところがここは地すべりが起こりやすい。一見傾斜が緩やかそうなのですが地すべりが起こりやすい。ですから、普通のオープン水路なら、彼らだって切るだけの土木力がありますが、それを切りますと、残念ながら地すべりが起こる。引くに引けぬこの悲しさということです。それを私は知っていましたから、囲炉裏端で話しながら「それなら要するに地層を切らなければいいのでしょう。日本にこういうパイプがあるのだが、それを風化した地層の所はうめて、地形によっては空中を渡らせればいいのだ」と言ったのです。この水の供給問題が非常に人気があったのです。先程のプリテスト(予備調査)の話に戻りますが、この二種類を選びました。一つは、先程の軽荷線(ロープライン)です。それからもう一種類は塩化ビニールのパイプによる簡易水道です。簡易水道のほうは1000mの所です。結論からいいますと、軽荷線のほうは残念ながら失敗でしたが、簡易水道のほうは、大成功だったのです。

ここでそのわけをちょっと申したいのです。軽荷線は持って行ってくださる諸君に私は言ったのです。向こうへ予備テストに持って行くな、山のスケールが大きいんだから、遠距離からスーッと飛ばさないと彼らのニーズに副わないのだということです。ところがそこが失敗の原

因だったのです。やっぱり持って行く人たちは、「私のいうのは、幾ら何でも原始的すぎる。第一、僕たちは東京工大の山岳部だよ」といって、工大だ、技術者だ、だからそんな技術的に程度の低いものを持って行ったら恥ずかしいという見栄がそこにあった。それから長距離を運ぶためにつるべ式で揚げ荷も出来るものを用意して行ったんです。その代わり延長は500m弱なのです。これでは、立派にできました。現地で村人の熱意によって見事に完成したのです。水道のほうも完成しました。完成はしたけれど、一体何のために何を運ぶのかということになってくるのです。そしたらなんと日常のニーズにピタッとこないのです。だから技術的には完成されたかも知れないけれど、生かされないのです。やがてその間にその支柱になる木は腐ってきて、昨年始めに予備調査に行き見たときには全然役に立たない。みともないから、撤収して倉庫に入れとけとことにしたのです。つまり、ここで私が申したいことは、本当のニーズに根ざしていないと駄目だということです。きわめて当たり前のことです。技術者で技術に腕がある人間ほどこの点でつまずき易いのです。つまり、技術的に高級なものが、何か価値があることであるという幻想にとられるのです。そういうものは技術のお遊びなのです。生きなくては駄目なのでしようという観点に、技術者はにぶすぎるんです。わたしはそういうことが結局いかなかった決定的原因だと思います。これに反しまして、パイプラインのほうは1000m敷設しました。これは生きたのです。昨年始めに行き見ましたら、驚いたことに、近隣の村々は競争で水道を造り出してきていたのです。それもなかにはもう自力でやるのだといって涙ぐましいのもありました。どこかインド近辺からあやしげな鉄管を手に入れてきたり、ゴムホースのようなものを手に入れてきたり、それでもやれるのです。それで5年前のわれわれのプリテストにネパール政府も関心を強く抱き出したんです。昨年の春行ってみたら、政府が表看板に立ち、国連のなかのユニセフという児童福祉局が大がかりな事業にしておりました。又ヘリコプターまで動員して、ネパール中の大変な僻地の山中で痛切に水を必要としているところへパイプラインを空輸作戦で持って行っています。もう数十箇村にすべてにパイプラインを成功裏に敷設が終わって、あと予定が100いくつあるとあって、ユニセフの壁の地図上にピンが一杯さしてあります。ついでにいいますと、そんな必要な村がネパールの中だけでどのくらいあるかといいいますと、まだ正確な推定はしてありませんが、先ず勘でざっと3000位あるだろうと思います。ヒマラヤ全体となったらさらに夥しくあります。こういう状況で大成功でありましたことは、昨年始めに予備調査に行った結果判ったのです。もうひとつ予備調査で本格的にいよいよ立ち上がるためには、もう一度最近の村人達の状況を見ておきたいし、気持ちも聞いておきたいとおもったのです。行って驚きましたのは、10年前の約束であったのにあたかも昨日のこのように、期待して待っていてくれるのです。

我々の熱意は絶対衰えていないというわけで、そうか、これだけ実弾が入っているなら申し分ないと、みきわめをつけました。そこで日本に帰ってきて本格的にエンジンをかけるというわけです。本格的にエンジンをかけるなんていいまでも、先立つものはお金なんですが、一体どうするのだというわけです。徒手空拳、空をにらんで腕組みして、どうして風雲を巻き起こすかといったようなものであります。そこで、色々苦労した拳句に、ようやく今年の7月にヒマラヤ技術協力会と称するあやしげなる団体を任意団体でつくり、さあ募金だということになったのです。募金は といったとたんに未曾有の不景気で、一体金を出すところがあるかというわけです。この問題解決の最後の奥の手は何であるかという、できないことをしてかすゴリ押しより外にないというわけで、困りましたけれど最低限の日本脱出だけの資金は調達できたのです。それは全く社会のいろんな方面から支持を得たのでした。さあ、金はできたがというわけで、メンバーを結局的にこの指とまれ式にボランティアで編成しました。レギュラーメンバー8名、その他応援団が色々ありました、それで出掛けたのです。

そこで用意した技術は何であったかといいますと、3種類でした。そのうち一つは既に成功を収めているパイプラインの簡易水道です。これを約4000km近く持って行きました。それからもう一種類がいまのロープラインです。第三のものがポンプなのですが、これが真に不思議なポンプでして日本で発明されたもの、一口で言うと無動力で水がフーッと高い所にあがるのです。「お前、頭でも狂ったのではないか、永久運動の迷信におちいつているのではないか」と思われるかも知れませんが、けっして物理学の法則にそむいたわけではないのです、どこがといいますと、取入口を造って水を取り入れ、落差でわずか4mです。はすかいになっていますから、32m位の鉄管で水を落とすのです。その鉄管は真っ直ぐでないといけません。何本か継いで真っ直ぐでなければいけない。そのズドンと落ちてくるウォーターハンマーの力をプッターバルブで受ける弁がありまして、ドーンと力を受けて反動でガーンと跳ね返るわけです。その時に円くかいた本体に水がドーンと押し込まれるわけです。逆流しない弁がありますから、もう入ったら出られない。それで空気も若干入るのです。そうすると空気も押し詰められて、カンカンになって怒るわけです、この野郎と。そこで水は空気に追いつてられて、別のパイプからガーッとあがるのです。しかし、ウォーターハンマーだけではあまり大した高さにあがらない。少しあがるぐらいですが、自動的に空気の泡をまぜるので水が軽くなって、ピューッと約25倍上がるのです。相当の量です。ですから4m落とすだけの力で100mあがるのです。こういうポンプを名づけてスーパーハイドロポンプといいます。発明者が宮沢秀明さんという方で、もう数え年で80歳のご老人です。宮沢さんも今度我々のヴィジティング・チームの隊員で、現地の山奥までこられました。ついでにうそのようなほんとのことを申しますと、幾ら宮沢先生は元気だといっても80だ。私は大変心配して、体の強い強力(ご

うりき)を迎えるために空港の歩き出す出発点まで山奥から派遣させておきました。それはかごの上に蒲団を敷いて宮沢先生を座らせ、3人交互にかついでくるように手配をしたのです。ところが、宮沢先生の方はそんなテレクサイことはできないとあって、トコトコと上がり下がりのはげしい山坂を歩いてこられました。まあ強い方だなあと思いました。髪は黒々なのです。正に怪物みたいな人です。満80歳の誕生日をヒマラヤの山の中でやったというのは、まさにレコードホルダーだと思うのです。しかも現場で泥んこになって点検したり、アドバイス与えたりして頂きました。帰りにはもっと元気になって、ヒマラヤに行って体の調子がよくなったとおっしゃるのです。実はその宮沢先生のおじいさんは、明治の御一新のときに信州上田藩の城代家老という役目をしておられたそうですが、あのころは藩というのは大変な時期で、結局財産処分をしなければいけなかったのです。そしてこういうことになったのはわしの責任だといって、切腹して亡くなられたのだそうです。その時のお年を聞いたら103歳だったときいて驚いたのですが、そのまたお父さん、だからおおじいさんは105歳まで生きた方だそうです。まだまだ老人くさいことをいうのなんか照れくさくていえやしないといわれる方でした。

こんな次第で、ともかく3種類持って行った。結論から申しますと、3種類とも全部、全弾命中でした。ロープラインは9km半ぐらい張りました。3か村にわたって張りまして、パイプラインも全部エントリー近くまで張りまして、ポンプも2セット持って行って、いまでも、不思議なことに、どんどん水が下から上へ上がっているのです。しかも番人はいない。夜昼間断なくガンガドーンなんていいながら水が上へ入がっているのです。村人は気狂いのように喜んだわけです。ほんとうにもう涙なくしては語れぬような感動を私どもは覚えたわけです。ところがそれだけ私は申し分なくやれたと思っておりますが、始めからそんなにスーッとうまく行ったのかというと、実は1番難儀しましたのは、日本から運び出した荷物です。荷物がカルカッタの港につきますと、そこで通関し、ネパールの国境までインド領を通過させるのが一番いやな大変な仕事でした。ネパール領に入ったときには、万歳といってビールを飲んで快哉を叫んだものです。それから問題は車が入る終点のポハラという町からです。そこからは歩くよりほかに仕方がない。ところが歩くのが日本人の足で3日から、ときとすると4日もかかるのです。上がったたり下がったりの険しい山道です。途中には海拔2800数十mの峠や1,7~800mの峠があります。そういうところへ目方ものをつぎこもうというのですから、一体この山道輸送がうまく行くかどうかということが大問題だったのです。このためにはもういろんなことを考えていましたが、あまりにも鮮やかに行ったのです。すなわち、出発点のポハラという町には、5ヶ村の代表者が待ちかまえていたのです。こちらの先発メンバーが着いたら、早速連日連夜の会議討論です。どうして運んだらいいだろうかについて、ああでもない、こうでもない、大激論をやった末に、彼らの間で、輸送リーダーを選出しまして、村々が各々自信のあるやり方

で運んでしまった。ですからボハラから目方ものの運搬の経費はゼロです。それは村人の熱意で彼らの負担で運んだということです。ですから、村についてからの工事もすべて村人の実質的な熱意によって行われました。こちらのメンバーは、それを技術的にリードして行くという役割を演じました。村人がほとんど主演のようにしてズーと運んで行ったのです。

こうして大変うまく行ったが、ただし何から何まで円滑に行ったとは必ずしもいえないのです。途中で色々なつまづきがありました。例えば、そのなかの一つを申し上げますと、5ヶ村ありましたなかの1ヶ村は、私が行って見たら、何だかブーブー文句をいっているのです。あっちこっちで陰口をいっては不満が流れてくるのです。それは、先発の人がちょっと方針を誤ったのだと思います。どういうことかといいますと、去年の春に予備調査に行ったときは、村人の意見もよく聞いて一緒になってその計画をねったわけです。だから、どこに何メートルのロープラインを張るかとか、ポンプはここだとかいうことをちゃんと村人と一緒にお互いに参画する精神でやったわけです。ところが日本に戻ってまいりまして、ロープラインについて技術上の難点の問題になったのです。始め張る予定のところでは傾斜が緩すぎて難しいのではないかという技術上の難点がいろいろ起こって、場所を変更しなければならなくなった。その時点からちょっと誤りが起こってきた。そこで、日本側で独断的にここを先やって行く。この線はこっちへ変えてとか、勝手なブループリントをつくってしまったのです。それを現地に臨んで、技術上の問題は我々の注文を聞いてもらわなければならんといった高圧的な態度にいった。そこで最初のほんとうの参画精神からこちらのメンバーがずれたのだと思います。急カーブにそれたのだと思います。そうなりますと、ブースカブースカと陰口があっちでもこっちでもくすぶるのです。私は、これはいかんと思いました。到着してそういう状態を知ったのだから、こりゃいけない。そこでゼロからやり直せというわけで、村の人達と一緒にしてもう一回測量もし、いろんなデータもとり、そして村の人たちの意見も参考にした上で、村側の連中と一緒に集会を開き、事を運びましたところが、こんどは気味が悪いぐらいうまく行きまして、爆発的なエネルギーが出てきたわけです。そうだと皆が腹の底から得心するプランになってきたのです。そうしますと、あとはトントントン拍子に行くわけです。こんなことを申し上げているときりがありませんし、私に与えられた時間もそう多くはないので、しめくりのような問題に移りたいと思います。

私今度まいりまして、いささかこまかくいえば、6 つぐらいの点、それから大まかにいいますと4 つぐらいの点について非常に痛感しました。そのひとつずつ申してみたいわけです。まず一つ大事なことは、「自然の一体性」ということをよく見ぬけという問題です。例であげますと、あの先程のロープラインです。ロープラインを我々が持って行きましたら、ネパール内に駐在しておる某外国の林業専門家と称する人が我々の計画を政府に対して讒言したので

す。そのためにわざわざ山奥に工作に出掛けたというのですから、念が入っているけれども、
どういうふうにいったかという、川喜田らがロープラインを持ちこむと、何でもかんでも運び
やすいものだから、村人が無制限に森を切っていまに坊主山にするだろう。つまり自然破壊
だというわけです。相当な程度に一時政府が動かされたいらしいのです。私がそれを知って、
非常に憤慨して、反撃に出たわけです。冗談じゃない、と。ロープラインをつけないと自然が
破壊されるのですよ、ということなのです。このところが一番大事なのですね。それはこうい
うわけなのです。ロープラインというものをつけますと、いままでよりずっと遠いところから沢山
の草とか薪を運べるわけです。遠くから運べるだけでなしに、非常に広い範囲から運べるの
です。ですから、草や薪の絶対量は増えながら、1ヘクタール当たりの収量は減るのです。
つまり、あまり木を切りすぎたり、あまり草を切りすぎたりしなくて済むのです。森の再生産力と
か草地の再生産力の許す範囲内で収めることができるのです。それがいままでの状況はどう
かといいますと、日夜自然破壊が進んでおるわけです。ロープラインなんかつける前に日夜
自然破壊なのです。それは今のような方法が出来ないですから、本集落に近いほうからまる
でいなごが食い荒らすように、かいこが桑の葉を食い荒らすように、もうほとんど壊滅的な自
然破壊をやって行っているのです。それが救われるのです、ロープラインで運ばれた草は乳
製品をふやした上に、家畜は堆厩肥の増産につながるのです。水田と違い、畑というものは、
耐久肥を失った場合には、見るもあわれな状態になります。そこへどさっと増産された耐久
肥をやりますと、ヘクタール当たり作物の収量が一度にあがるのです。そうなれば無理な急
斜面まで、地すべりの原因までつくって、階段耕地化する必要はなくなってくるのです。無理
のない耕作面積だけを集約的に経営すれば、足りるところになるのです。だから、ロープライン
を、つけなければ、自然の破壊はくい止められないということです。なぜそういうことになっ
たかといいますと、1世紀前にはその辺の村々は数十箇村で、人口はそれほど顕著に増加せ
ず、村をとりかこんで、同円心の構造で生態系として安定していたのです。ところが一世紀ほ
ど前から得に最近4・5年の間に人口の激増期になってきたのです。日本でいえば明治から
大正、昭和前期にかけてこのような激増期です。日本以上のはげしい激増期です。そのた
めに本村が膨脹し、食えない連中が印度あたりに流れて行ったといわれています。これでは
どうしても村内開拓をどんどん進めざるを得ないわけです。その結果、結局彼らだって森を
破壊してはまずいのだというぐらいはよく分かっているのです。そんな外部の専門家なんか
にもっともらしい説教されなくたって、わしの方がよく知っているわいというようなものです。
ところが知っておりながら明日の日のために破壊を続けなければならぬこのつらさというわけ
です。そういうことも分かりもせぬ林業専門家なんかきて、つんとすました顔で、お前らはどう
せ馬鹿だろうから教えてやる、といわんばかりのことをやりますと、なんの利益もない。まあそ

ういことです。つまり昔は安定していた生態系の中で人口だけが異状肥大をとげてきますと、生産手段とか消費の方法とかひっくり返して生活様式のほうも膨脹する、人口に見合うような変革をしなければ、生態系は決して安定してこないです。それは一例なんでありませう。「自然の一体性」という言葉で私は一言でそのことを訴えたかっただけです。「自然の一体性」というものをわきまえないような開発はいかんということだ。そのことさえわきまえるならば、開発イコール自然破壊であるというつまらぬ公式論はやめろといいたい。場合により、開発しなければ自然が破壊されるのだという場合まであるのですよ。そういうものを公式論という安手な包丁一本で、なんでもかんでも料理しようということほど、現状を無視した非良心的なことはないと私は思うのです。大事ということは自然の一体性ということだ。人間社会を含んでそのことをよく考えようということだ。

それから第二点は「参画の重要性」だ。これを先程からいろいろ例を申しました輸送ひとつとりあげても、あれを商業ベースの人夫賃を払って頼んできたなら、いくら金もらったってこんなものを運ぶのいやだといっただけで途中で投げ出してしまふのです。現にそういう例が予備テスト時代に一つあったのだ。これも問題なくなりましたのは、参画の威力だ。参画的な精神で事が運ばれたら、すごい威力を発揮するか、またそれによって関係者が村人たちと私たちとを問わず、そういうものの中にほんとうに心の連帯が育つのだ。つまり、志を同じゅうするメンバーが一緒になって力を合わせて、それがうまく実って行く過程で、さらにその連帯性はものすごく成長するということだ。もちろんその根本精神を誤ったら、逆に崩壊して行くのだ。こういう意味の参画の重要性はほんとに重要だ。その様にやっただけで、新しく導入した技術というものには維持できるのだと思うのだ。そうでなかったら私たちが去ったならばまた「もとの木阿弥」にしかならないということだ。それからもうひとつこの参画の問題は非常に重要だと思ひますが、よくこういう誤解をする人が多いのだ。どうせ外部の人間が現地人に同情がましくセンチメンタルなことをやって協力したって、そんなもの体を張ってない。引き上げたら所詮は外国人だから、そんなことをするのは偽善的だといふ人も出てきます。私はインサイダーであるか、アウトサイダーであるかは、そういう表面的なことで決められないと思ひます。いまのようなことをいう人の話を聞いていますと、しまいに私もそこに住みついてそこの娘っこと一緒に一生骨を埋めなければいかんみたいなことをおっしゃる。私はそのほうこそセンチメンタルで嘘つきだと思ひます。そういうこととして悪いとはいひませんけれど、インサイダーというのは、村に住んでいる人間で、アウトサイダーというのは日本から来た人間だといふ考えはどこか狂っていると思ひます。そうじゃないのだ。こういうことをやるよと、ロープラインをつけようとか、スーパーハイドロポンプで水揚げしようとか、その共通の課題に対して、参画する人々がインサイダーなのであり、そういうことは興味ないよといふ人

はアウトサイダーなのです。ですから、たとえ何百年その村に住みついた村人であっても、私どもが今度やろうとしたことに関心がない人がいたとすれば、それはアウトサイダーなのです。たとえ日本から来たわれわれでも、一緒になってこれをやろうとする志の人間であれば、インサイダーなのです。志を同じゅうすると書けば同志がインサイダーなのですと私は思うのです。よくテレビを見ていたら西部活劇をやっている。ローン・レインジャーなんてでてる。西部の街にのりこんでチャンチャンバラと二丁拳銃で勇ましくやり、そして最後は「はいよシルバー」とか言って、さあーと去っていく。物語の発生からわずか一週間か10日ぐらいしかないようなストーリーもあのかなかにいっぱいあると思います。それならば、ローン・レインジャーなんていうのは、西部のある街にある日ヒョイと来た完全なアウトサイダーかといったら、そんなことはない。第一、テレビ見ていてほしい面白いです。面白いというのは、ローン・レインジャーが西部のある街にとってインサイダーとしてその誰かと一緒に同志集団として集まっているから、あれはたった一週間いても、インサイダーなのです。そのほうが私はほんとだと思えますよ。

参画の問題を申しましたが、それから第三に技術を現地に適用させるということが非常に大事だと思いました。技術の現地適用化だ。簡単な例でいいますと、スーパーハイドロポンプなのです。宮沢先生は発明者のくせに造ることが面白いのです。まあ、天才的発明家って皆その傾向があるでしょう。造ることが面白いのであって、売れることが面白くはないんです。ああいうポンプは日本なんかではあまり適したポンプじゃないのです。なぜなら、日本だったら随分山奥でも何とかして近くから動力を持ってくることが割に簡単だからです。しかしアメリカみたいな広い国になりますと、一方では、すごい動力が発達していながら、他方ではやっぱりスーパーハイドロポンプが必要だという地域もかなりある。だから、アメリカなんかから1000台ぐらいくれとって注文がきたりするという状態です。それから、東南アジア諸国やさきほどのネパールなんて国は、そういう国にこそこのポンプは生きるのです。もちろん日本で使って悪いという事は少しもないのです。日本のなかだってそういうところは少々あるでしょう。ところが実際日本のメーカーは、それを日本のなかで売ろうとするが、それを必要とする外国へのPRはあまりうまくできていないらしいです。見当違いの方向に鉄砲打っているということです。それから宮沢先生自身がヒマラヤの現場を見て、これはしまったといわれたのです。私のこのポンプは日本のような平たい国向きに造られたといわれるのです。あの落とす水のパイプの角度が7度なのです。それは日本だったら7度ぐらいにしておかないと、十分のドロップ、このヘッドが水を4mとするヘッドがとりにくいからなのです。ところがこちらへきてみたら、すぐ4mぐらいの落差なんていうものはわけなくとれる。それだっただけで深い角度で作っておくのがよかったといわれた。なんでもないようなことですが、技術を現地に適用させると

いうきめのこまかさということが大変大事なのです。こういうことが意外なぐらい見落とされている。

それからもうひとつ四番目に力説したいことは、「その地域の個性を活用せよ、個性を見抜いて活用しろ」ということです。事例で申しますと、ロープラインを張るには、まずヒマラヤの現地の個性に合わすために、原始的な技術に見えるようですが、私どもの用意したロープラインは実は新製品といってもいいぐらいのものなのです。なんだ簡単な蜜柑山のあれかと思うのですね。そんなものならもらい下げてきて、向こうへ張りゃいいのさと思ったら大間違いです。実は日本の蜜柑山でも使っていないような新製品を持って行ったのです。なぜならばヒマラヤは日本と違う条件が三つあるのです。第一、不便な山奥へ運び込むのですから軽くないと困る。次に、山のスケールが静岡県の蜜柑山よりは一桁大きいのですから、一張りのこの1ピッチの距離がうんと長くないと困るのです。ですから、今度は平均1,000mです。最大限1,300mぐらいまで。一度に張れるのを持って行ったのです。だか、ロープそのものが強靱なテンションに対して強くなければいけない。それからヒマラヤの山奥は日本みたいな贅沢な使い捨てはできないのだということです。だから一回つけたら、できるだけ意地きたなく長い年月もったほうがいいのです。つまり摩耗度が強くないと困る。この3条件を、私はメーカーの会社をお願いしたんです。軽いこと、テンションに強いこと、それから摩耗度に強いこと。会社でOKというわけで、私はテストまで事前に十分立ち会ってきました。持って行ったのを表面的に見たら、何か古い技術のものを持って行っているように見えますけれど、意外や意外、新しい技術のほうがピタッと当てはまるのです。それからそれを張りますときに、何トンという荷重がステーションにかかります。だからアンカーが必要なのです。普通の常識ですとセメントの何袋も必要だということになるのです。ところが一かけらもセメントを使わなかったのです。なぜなら、どこを掘っても片岩の石材が出てくるのです。しかもそれを積み上げる村人たちの土着の技術がまんざら捨てたものではないから、ここにこういうステーションを造ろうといいますが、あとは分かったというだけで、見事に積み上げます。セメントなんて、どこに要るのだらうということなのです。石にまきつけてポンと穴掘ってうめておいてガッシリとしたステーションを造った。それがセメントを何トン使わなければならないというようなこといっとたら、第一、金がかかって仕様がないです。それから村の連中にしても自分達の石材技術でできたということは誇りなのです。そういうふうにもその地域の個性を見抜くということと関連しているのです。個性を見抜くという問題は敢えてそういう資源の問題だけではないのです。もう一例だけ述べて締めくくりにしたいと思います。

今回協力した5か村のうち4か村はマガール族という日本人そっくりのかなり素朴な民族なのです。そして大体、人、村というコミュニティだけで生活様式が完結しておる民族。ところが

1 か村はちょっと低い地にありまして、お米も栽培できるのです。海拔で 1,700m ある。そこはヒンズー教徒の村なのです。マガール族とヒンズー教徒はこうも違うかと思うぐらい随分違います。日本人が 10 人行くとならば 9 人まで大のマガール族ひいきになって、ヒンズー教徒はいやだという傾向があります。私はヒンズー教徒に差別的感情を持っているのでは決してなく、ある理由からいくらその村から要求されても、ヒンズー教徒の村にはロープラインは張らなかったのです。その代わりにさっきのスーパーハイドポンプをサービスしたのです。マガール族の 4 つの村には、4 つのうち 3 つですが、それにほとんどロープラインを張った。なぜかといいますと、マガール族は、森がなければ、生きて行けない生活様式の構造を持っております。それに対応して、マガール族の人たちは森を愛しているのです。大事な森だと思っているのです。だから森林保護なんてお説教されなくたって、こちらのほうが余程分かっているようなものなのです。ただ先程のように分かっているながら切らねばならぬこのつらさという問題があるだけに、そこへロープラインをつければ、改めてしみじみと自分たちの森を含む自然を大切にしなければいかんとつくづく改めて確認したと彼らはいうのです。

ところがヒンズー教徒の人たちは違います。決してヒンズー教徒の人たちを罵 意味でいうではありませんが、ヒンズー文明というものが大体北印度の平原に発達したもののなのです。一言でいうならば、森を敵として縄張りを拡張していったのがヒンズー文明なのです。その片割れがヒマラヤ山中に入り込んでここにいるというわけです。ですからそれに対応して、森を見つめる目つきが違うのです。森は経済的印象としてのみ見、森を愛してはいないのです。そういうところへ便利すぎるロープラインが出来ますと、どういうことになるかという、切だけ切って薪にして売り飛ばし、金を握ったら、夜逃げしようというようなことになりかねないのです。だから物騒ですからそれはご遠慮願おう、ポンプのほうが良いというふうにしたのです。これは先程の資源ではなくて、風俗習慣の面であげた例です。要は個性を見抜かなければならないということです。

次にもうひとつ、創意工夫の必要性とか、いくつもの問題があるのです。もちろんいうまでもなく「採算性」ということを決しておろそかにしてはいけません。採算性からいいますと、びっくりするぐらい黒字でやれるのです。一例をいいますと、ロープラインはネパールだけでも 2,000 個所以上必要とする村があります。その一村あたり平均ロープラインが 3.4km もあれば平均的に足りるのではないかと思う。かりにそれが 6km あるとすると、メーカー会社に計算してもらくと、1 村半ぐらいのワイヤーロープがネパールの首都カトマンズ渡しの値段で 2,000 ドルにならない。そのなかには陸海の運賃から保険料から商社のマージンまで入れて、たったの 2,000 ドルになるかならない。その 6km のワイヤーロープをうまく生かしたら、1 年でどれぐらい利益があるかという、最低見積もっても 50,000 ドルはもうかる。おそらくそれ

以上でしょう。だから1ヶ月稼動したら、実はもとをとってしまっている。しかも1年間でローブは蒸発してしまうものではないから、使いつぶすまで使えるんです。大変な黒字で出来るのです。私は決して経済利益イコール福祉の向上とはもとより思っておりません。金銭に浅ましい連中に分かり易くするために、一応経済計算をしてみただけなのです。そのために間接にミルクが増産され、大人も子供ももっと余計に飲めるようになって健康がよくなるとか、時間の余裕が出来て学校へ行けるようになるから教育が変わってくるとか、それの方が実は重要な利益だと思うのです。かりに直接経済利益だけで勘定したとしても、パイプラインとかポンプについても全く同じことなのです。そうすると、一体何が障害になってそういう技術協力が世界的にうまく行かないのだろうかということです。はっきり言って、ほんとにそういうところに大いに協力してやろうという沢山の人々と現地との間にあるものは、結局政府とか会社というものです。その中間のパイプがどこかおかしいのです。どこかとまっているのです。そこが問題だと思う。

これまで私は4つ挙げて来ました。「自然の一体性」と「参画の重要性」、それから「技術の現地適用化」ということと「個性の尊重」ということを申し上げた。特に、私は「参画」ということを力説したつもりです。よく考えますと、この「参画」という言葉は、最近の日本、十年ぐらい前から日本ではやり出してきたのです。ところが最初は英語の Participation を訳して、新聞など時々「参加」なんて訳していたのです。私はこの欧米の翻訳的概念を弄ぶ味がどうも好かんです。それに参加っていうと、何だか経営参加の程度のものしか考えられない、私は計画の「画」をつけて「参画」といいならわしたのです。「参画」というのは古い言葉で昔からあるのです。その参画が大切だという場合、今日の社会ではその重要性が随分叫ばれているのです。ここで時間がまいりましたので、これで私の話を終わらさせていただきます。ご静聴有難うございました。(拍手)

(昭和50・6・25 講演・文化人類学者)